

**(5) 国語科における学習評価について**

平成 22 年 3 月中央教育審議会教育課程部会において「児童生徒の学習評価の在り方について」の報告がとりまとめられ、学習評価の考え方や、今後の方向性等について示されました。

学習評価は、学習指導要領に照らし合わせた評価規準を基に児童生徒の学習状況の評価し、その後の指導に生かす「指導と評価の一体化」を図ることで、「確かな学力」及び「生きる力」の育成を目指しています。以下、学習評価の考え方ははじめ、国語科における評価の在り方について説明します。

**ア 新学習指導要領における学習評価の基本的な考え方について**

上記の報告を受け、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」では、「学習評価の改善に係る 3 つの基本的な考え方」を、次のように説明しています。

- 目標に準拠した評価による観点別学習状況の評価や評定の着実な実施
- 学力の重要な要素を示した新しい学習指導要領等の趣旨の反映
- 学校や設置者の創意工夫を生かす現場主義を重視した学習評価の推進

新学習指導要領の下での学習評価については、児童生徒の「生きる力」の育成をめざし、児童生徒一人一人の資質や能力をより確かにはぐくむようにするため、目標に照らしてその実現状況を見る評価を着実に実施し、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要であるとともに、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが重要である。

また、今回の観点別学習状況の評価の改善は、特に、「学力の重要な要素を示した新学習指導要領等の趣旨の反映」と関連している。学校教育法の一部改正を受けて改訂された新学習指導要領の総則に示された学力の 3 つの要素を踏まえて、評価の観点に関する考え方が整理された結果、これまでの観点の構成と比べると、「思考・判断」が「思考・判断・表現」となり、「技能・表現」が「技能」として設定されることとなった。

さらに、各学校や設置者の創意工夫を一層生かしていくことが求められており、各学校では、組織的な取組を推進し、学習評価の妥当性、信頼性等を高めることが重要である。

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」国立教育政策研究所 p. 3

**イ 各教科における評価の観点について**

学習評価の 観点	内容・留意点
関心・意欲・ 態度	各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するものである。 授業の姿勢や態度一般としての「関心・意欲・態度」ではなく、各教科等の学習に即した学習状況の評価するものであることに留意する。
思考・判断・ 表現	それぞれの教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するものである。 「表現」については、基礎的・基本的な知識を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価する。つまり、「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動の中で児童生徒が表出したものである。
技能	各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するものである。これまで「技能・表現」として評価されていた「表現」をも含む。
知識・理解	各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうか、評価するものである。

## ウ 新学習指導要領の趣旨を生かした国語科の評価について

国語の観点	評価の観点	評価内容と留意点(※)	評価方法例
国語への関心・意欲・態度	関心・意欲・態度	単元の学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を評価する。 ・言語活動等への取組の関心・意欲・態度 ・学習に関する読書及び読書によって見方や考え方を広げようとする姿勢・態度 等 ※全ての単元に位置付ける。	○観察 ・発言・発表 ・姿勢や態度 ○記述したもの ・ワークシート
話す・聞く能力 書く能力 読む能力	思考・判断・表現 基礎的・基本的な知識・技能	単元で重点的に指導する領域に対応した観点を設定し、言語活動を通しての各指導事項の実現状況を評価する。 ・各領域に即して思考・判断したことを、言語活動を通して評価する ※国語の場合、「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」を、学習指導要領の内容のまとまりに合わせ、基礎的・基本的な知識・技能と「思考・判断・表現」とを合わせて評価する観点として位置付けている。 ※基本的に一単元一領域。	○記述したもの ・ワークシート ・作品 ・原稿 ○観察 ・発言・発表 ○ペーパーテスト
言語についての知識・理解・技能	基礎的・基本的な知識・技能	単元における〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に示された各指導事項の実現状況を評価する。 ※各領域の指導を通して指導することから、全ての単元に位置付ける。	○記述したもの ・ワークシート ○ペーパーテスト ○観察 ・発言

※評価規準作成の際は、「評価規準の作成のための参考資料」（国立教育政策研究所）の設定例を参考にするとよい。

## エ 評価規準・評価方法の設定における留意点

### (7) 単元目標と評価規準は一体のものとする

指導と評価の一体化を図るためにも、評価規準を単元目標とのずれがないように位置付けます。単元で指導する内容（身に付けさせたい力）を明確にし、指導したことを評価し、次の指導につなげる展開を組むことにより、単元で身に付けさせたい力を一貫性のあるものにします。

### (4) 児童生徒の実態や教材等を踏まえて評価規準を具体化する

学習指導要領に照らし合わせながら、既に身に付いていて活用できる力、課題と見られる力など、前単元までの学習評価を踏まえた上で具体化します。また、教材の特長を踏まえた上で設定します。

### (ウ) 単元に適した評価方法を具体的に設定する

その単元で身に付けさせたい力を明確にし、適正な評価方法を設定します。また、評価場面において、児童生徒のどのような表れを評価するのか、具体的な評価方法を考えます。

## オ 評価に当たっての留意点

### (7) 学習過程や学習結果における評価を、継続的・総合的に行う

評価は学習結果だけでなく、学習過程においても行うことが重要です。学習過程で評価したことを以後の指導に生かすことが、単元目標の確実な実現につながります。

### (4) 教師の学習評価の力量を高める

学習評価の妥当性や信頼性を高めるためにも、教師間で、評価資料や児童生徒の学習の様子等の解釈の仕方を協議するなどして、学習評価の力量を向上させることが求められます。

### (ウ) 児童生徒が行う自己評価や他者評価の留意点

児童生徒が自己評価を行うことは、自分自身が身に付けた言語能力を自覚することであり、次の学習での活用や、国語を学ぶ意義の理解にもつながります。留意したいのは、児童生徒の行う評価は教師の評価とは別であり、あくまでも学習活動の一環であることを理解しておく必要があります。